The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	Beyond the Border : Language and Sexuality in Oscar Wilde's Work
Author(s)	金田, 仁秀
Citation	大阪大学, 2004, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/44755
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【27】

氏　　名	金田仁秀（かねだ まさひで）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学位記番号	第　18312　号
学位授与年月日	平成16年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科英文学専攻
学位論文名	Beyond the Border : Language and Sexuality in Oscar Wilde's Work （ボーダーを越えて——オスカー・ワイルド作品における言語とセクシュアリティ——）
論文審査委員	（主査） 教授　玉井　暲 （副査） 教授　森岡　裕一　　助教授　服部　典之　　助教授　片渕　悦久

論文内容の要旨

本論文は、イギリス19世紀末の文学者オスカー・ワイルド（1854－1900）の代表的な作品を取り上げ、ワイルド文学においては言語とセクシュアリティが極めて密接な関係にあることを指摘し、その意味を考察した研究である。論者は、考察に当たって、ワイルドが文学形式、言語表現、セクシュアリティの表象において、それぞれの慣習的世界を逸脱する傾向を見せている面に注目をし、それを「ボーダーを越えようとする」志向性と呼んでいる。論文は、英語で書かれ、全体は、序論、7つの章、結論から構成され、本論、注、参考文献を含めて、A4版で計212ページから成っている。

序論では、ワイルド文学をめぐる今日的問題について先行研究を踏まえて整理し、続く第一章では、ワイルド文学の大きな特徴であるパラドックス、エピグラム、ウィットなどの言語表現のもつ意味を問題にし、言語の慣習的世界に対するそれらの転覆的機能を明らかにする。第二章は、「アーサー・サヴィル卿の犯罪」を取り上げ、物語形式の慣習を逸脱する側面がすでにこの初期の短編小説に現われていることを指摘する。第三章は、ワイルドの代表的批評エッセイ「嘘の衰退」と「芸術家としての批評家」において、伝統的には「矛盾」と呼ぶことができる言説が見られることを指摘し、ここに窺える多声性あるいは不確定性は自律的な芸術至上主義ではなく、ポリティカルな性格や機能をもつものであることを主張する。第四章では、『W.H. 氏の肖像』を取り上げ、この物語にはヘテロセクシュアリティとホモセクシュアリティの二項対立を脱構築するテクスト空間が形成されていることを説き、この「書き込み」を誘う空間こそセクシュアリティの慣習的言説を書換え、そのボーダーを問題化するものであると述べる。第五章は、『ドリアン・グレイの肖像』におけるホモエロティシズムを問題にし、この小説は、単一的なヘテロセクシュアリティの概念と現前性に依存するロゴス中心主義のそれぞれにおけるボーダーに書換えを迫るテクストであると主張する。第六章では、『サロメ』におけるセクシュアリティの言説の分析を行ない、この悲劇的作品は父権的言語の虚構性が暴露される点でフェミニスト的テクストだと結論づけている。第七章は、『真面目が肝心』を取り上げ、この喜劇の笑いの背後に存在する転覆性はロゴス中心主義を嘲笑し、その言説を崩すものであると述べる。以上の論を踏まえて、結論では、セクシュアリティの言説に揺らぎが生じた19世紀末時代の文学的状況にも触れながら、ワイルドの笑いを含んだ言語あるいはパフォーマティヴなテクストは、ロゴスの慣習的世界を撹乱し、その内側からの崩しを

図るものであることを改めて強調し、それ故ワイルド文学は、言語とセクシュアリティのボーダーを越える世界を志向する文学であると論を締めくくっている。

論文審査の結果の要旨

本論文は、ヴィクトリア朝から 20 世紀のモダニズム時代にかけて大きな文学的転換期を迎えたイギリス世紀末の作家オスカー・ワイルドを対象に取り上げ、その主要作品が、言語とセクシュアリティにおける慣習・伝統の世界に挑戦を行ない、その世界・境界を超越しようとする力を孕んでいることを解き明かし、この転覆的側面にワイルド文学の注目すべき意義を見出そうとした意欲的な研究である。ここ 30 年ばかりのあいだに現われたポストモダニズムの文学批評理論にもとづいて、これまで重要視されてきたとは必ずしも言えないワイルド文学のもつ興味深い今日的な意味を掘り起こすことに成功した斬新な研究となっている。特に、ワイルド文学の言葉をめぐっては、これまで誰しもが、パラドックスやウィットに集約される彼の特徴的で鮮やかな言語使用に賛嘆と驚異を表してきたものの、その種の言語についての構造的分析やそうした言語使用の背後に横たわる根源的衝動への考察は充分に行なわれてきたとは言えず、論者が本論において、ポスト構造主義的言語論の観点から、シニフィェとシニフィアンの乖離あるいはその間の約束事・慣習性の無化のありようを明らかにした考察は極めて刺激的であり有益なものである。また、ワイルドのセクシュアリティの問題は、従来伝記的事実に還元するだけで終わってしまうテーマであったが、論者は、言語論との関わりにおいて考察することにより、その問題性の大きな意味をみごとに浮上させ、また、ホモエロティシズムの言説というものの成立する根拠を広く一般に訴える論にもなっている。本論は、ワイルド文学の新しい可能性を開拓するための重要な一つの典型を提示した研究と言えよう。

本論は、このように優れた研究成果にもかかわらず、問題点がないわけではない。まず、「ボーダー」の表す内容は必ずしも明確とは言えず、論のどこかでその概念の輪郭、領域、性格・次元等について整理しておく必要があろう。ワイルドがもっているポストモダニスト的側面を力説する論はなるほど刺激的であるにしても、議論がキー・タームとの戯れに陥ったり、繰り返しが多くなったりする部分がやや目立つのも気になるところである。個々の作品のもつ固有の面白さを際立たせる論述が今後の課題として求められよう。

しかし、これらの点は本論文の本質的な価値を損なうものではない。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。